

あいさつ

吉田 靖

(国立教育政策研究所 研究企画開発部長)

武知 公雄

(徳島県教育研修センター所長)

吉田 靖（国立教育政策研究所 研究企画開発部長）

皆さん、こんにちは。国立教育政策研究所の吉田でございます。国立教育政策研究所から一言、ごあいさつをさせていただきます。本日はお忙しい中を、これだけたくさんの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。

この教育研究公開シンポジウムは、国立教育政策研究所の研究成果を、学校や教育委員会の皆さま方に広く知っていただくという趣旨で、各地の教育研究所、センターとの共催により毎年開催をしているものでございます。

平成2年に名古屋市教育センターにおいて、「コンピューターと教育」をテーマに開催したのが最初でございまして、今回が第22回目のシンポジウムとなります。本年度は、「確かな学力と生きる力をはぐくむ指導」をテーマにしております。

本研究所では、教育課程研究センターが実施し、皆さま方に多大なご協力をいただいております教育課程実施状況調査をはじめ、IEAの「国際数学・理科教育動向調査（TIMSS）」、OECDの「生徒の学習到達度調査（PISA調査）」といった国際共同研究など、学力に関するさまざまな調査を実施しております。こうした



調査を通じて、それぞれの分野における課題とともに、わが国の子どもたちが判断力や表現力が十分身に付いていないということや、勉強が好きだと思ふ子どもが少ないなど学習意欲があまり高くないこと、さらには、学校の授業以外の勉強時間が少ないというような課題も、浮き彫りになっているところでございます。

本日のシンポジウムにおきましては、本研究所の学力に関する調査を素材としながら、子どもたちにどのようにして生きる力および生きる力の知の側面である確かな学力をはぐくんでいくかについて、議論をしていきたいと考えております。

シンポジウムの最後のほうでは、極力フロアの皆さま方からのご意見もいただきたいと考えております。大変限られた時間ではございますが、このシンポジウムが学校・教育委員会における取り組みの参考になれば、幸いです。

最後になりますが、本シンポジウムの実施をお引き受けいただき、開催にご尽力をいただきました、徳島県教育研修センターの皆さま方に、心からお礼を申し上げまして、あいさつとさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

武知 公雄（徳島県教育研修センター所長）

皆さん、こんにちは。たくさんの方にこのシンポジウムにご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

さて、以前ある普通科高等学校の校長先生と話をしたことがございます。3学期になると、「武知さん、私の出番になるな」と言うのです。それはどういうことかと伺ったところ、高校3年生は卒業していくわけですが、中には残念ながら十分学力が付いていない生徒がいるんだと。特に算数の九九が言えない生徒が何人かいるので、その生徒について、いろいろな教材を準備して、九九をマスターしてから卒業させるのが私の仕事だ、というわけなのです。

別のある高校でも、なかなか教科書が読めない生徒がいる。せめて卒業した後、新聞はきちんと読めるように、というような指導もしていらっしゃる。そういう校長先生もおられたわけでございます。

そのような現状を踏まえながら、ちょうど2年前でございますけれども、徳島県では基礎学力定着化の検討委員会を設けました。現在の子どもたちのいわゆる到達度がどこまでなのかということで、小学校、中学校で、学力調査のテストをさせていただいて、現在は、基本的には読み書き算の基礎・基本を中心としまして、必要とされる基本的な力を身に付けさせるため、文科省の学力向上フロンティア事業ともリンクをさせまして、学校教育課を中心に取り組んでいるところでございます。いずれにしましても、到達度につきましては、県教委の予測を若干下回っているという状況が出ているわけでございます。

それから、10日ほど前に、国立教育政策研究所による、高校生の学力調査の結果が出たわけでございます。定性的に若干力が落ちているかなというふうなところだったわけですが、実際に数学、理科に関しましては、定量的に到達度に達していないというようなことが報告されております。

いずれにいたしましても、そのような現状が確かにある中で、確かな学力を学校において身に付けさせていくということになると、われわれ教師の役割が非常に重要になってきます。実際にそれぞれの学校において、学校のシラバスと言

ますか、それを明確に打ち出して、さらには学年の目標、クラスの目標、あるいは個人個人に応じた到達の目標を明らかにする必要があるのではと考えております。

また、われわれ教師の創意工夫を生かした指導、そういった中で、例えば1年たって、その指導の結果がどうであったのかというようなことにつきましては、当然地域や保護者に対して、アカウンタビリティ、説明責任も求められているわけでございます。

いずれにいたしましても、そういった課題に関しては、われわれ教師自身の指導力の向上が、強く求められているものと考えております。

本日、シンポジウムを開催いたしますけれども、このシンポジウムの中身を、ぜひ明日からの皆さん方の生活、あるいは教育の営みに生かされますことをご期待申し上げまして、お礼の言葉といたしたいと思っております。最後までどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

